

精神科訪問看護師がやっていること

－ 変化にむかう場の協働と創出 －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
白波瀬 裕美

私は精神科訪問看護を生業としている看護師である。精神科訪問看護の事例研究は、看護実践の成果をテーマとしているものが多く、その実践成果に至るまでの詳細なプロセスは、省略されることが多い。つまり看護実践の成果に直接に関連する実践と経過のみがとりあげられ、一直線に成果に向かうがために、詳細な、悲喜こもごものプロセスが省略される傾向が見受けられる。加えて、看護実践の成果が明確に得られなかった事例は、そこにある看護師と当事者の苦悩や悲嘆を含めて、社会的な視線に触れる世界に出ることがない。そこで私は、精神科訪問看護という現場において、看護師（支援者）が何を感じ、どう考えて行動しているのか。その現場において当事者の反応がどのように変化していくのか、といった生々しい経験を、2年間にわたって詳細に記述することを試みた。一事例ではあるが、そのプロセスに流れる精神科訪問看護の実践の知とは何かを明らかにしようとする試みである。これまで、可視化されていない経験を言語化し、精神科訪問看護がうまくいく必然としてあるものに、近づいていきたいと考えた。

訪問しても不在が続く。あるいは、お断りされても、支援が必要だと確信している場合には、出直して、再度訪問する。一歩進んで、また一歩下がるような経験の繰り返しも、続けることでしか、その先の支援にはつながらない。折り返しの支援が求められる。

現時点において、何より大切な精神科訪問看護の本質は、「うまくいくまで、支援をやめない」ということである。看護師として30年を超える職業生活は、いつも、本質的なことは何か、を探し求める時間であったと思う。本研究によって、私自身がこれからも看護師という専門職業人として対人支援を続けるための本質に出会い、エネルギーをもらうことができた。これまでも、これからも、面白がって精神科訪問看護を続けたい。